帰還してから見えて来た未来

【新井　芳美】

プロフィール
■避難時期・場所
2011年３月に埼玉県へ避難
2011年９月に山形県へ移動
■帰還時期・場所
2013年12月に伊達市へ帰還
■家族構成
本人、夫、長女、長男、次男
■2017年５月～伊達もんもの家勤務

帰還して約四年が経ちました。帰還は、第三子の出産、子供の小学校入学、入園を期に、伊達市へ戻ってきました。放射能への不安から思うように生活ができず、息苦しい日々を送っていました。

原発事故前は、この町、この自宅が大好きでした。近くに河川敷があり畑もあります。町場が近いのに自然が豊かなこの地で、子供達と畑を借りて野菜を作ったり、田んぼへ出かけたり、豊かに暮らしを楽しみたいと思っていました。しかし帰還直後の当時は、山形に帰りたい、たくさんお世話になった私の第二のふるさとへ、週末だけでも行きたいと暇を見つけては、山形へ子供達を遊ばせに行く日々でした。福島では、外遊びは本当にしてもよいのだろうか？この草に触っても？虫にさわっても？自由に動き回る虫が大好きな子供達に、いつもストップをかけてしまい注意してばかり・・・。「もうお家に入るの？」と子供に聞かれるたびに、自分に嫌気がさしていました。同時に感じる不信感、不安感から、この土地で本当に子供達を守れるか？その危機感が本能的に働いていたのかもしれません。

【サークルに支えられ、全住宅除染を願う】

当時伊達市では、三つにエリア分けした除染方法を先駆的に取り組んでいました。私の住む町は、Cエリアという区分とされており、住宅の除染は行わない地域でした。それでも自宅の庭だけでも、子供達に自由に草花や虫と触れ合ってほしいという気持ちから、市へ除染してほしいと懇願しました。しかし当時の制度ではかないませんでした。伊達市で

は放射能専門のアドバイザーを雇用し、全住宅を除染しなくても十分安

全だと広報し続けていました。そんな環境に、私は、危機感を募らせました。行政は誰の味方をしているのか？私たちと子供達を守る気が本当にあるのか？こんな町に住みたくない、毎日そんな気持ちがあふれてきました。

そんな中でも私を救ってくれるのは、同じ境遇の仲間たちでした。同時期に帰還したママみんなで、「伊達ママクローバー」というサークルをつくりました。月に一度子連れで参加し、お茶飲み会やお料理会を開催しました。託児ボランティアさんの手も借りながら、子供の事や近況を語り合いました。交流の中で、一人の悩みはみんなの共通の悩みとわかりはじめ、孤独感から救われました。

そんな中、山形で避難者支援に携わっておられるSさんが、みんなの悩みを知り、伊達市議会議員さんとお話会をしてみないかと橋渡しをしてくださいました。沢山の議員の皆さんと、伊達に帰還したママ達と話し合う機会が実現しました。また伊達市放射能対策課との話し合いの場も持ちました。私達は話し合いの中で「安全だといわれても線量はある、全住宅除染をして欲しい。」と訴えました。議員も放射能対策課も、「気持ちはわかります。しかし除染は基準があるためできません。」との返答でした。なぜ伊達市は除染しない選択をしたのだろう？・・・いくら考えても、理解できませんでした。

安心して子育てがしたい！その一心で、私たちは正式な手続きで、Cエリア除染に関する請願書を伊達市議会へ提出することにしました。市

議会へ請願書を出したこともない私たちが、初めて決断した勇気でした。小さな子供がいて、思うように行動できない時期でしたが、みんなで力を合わせて声を掛け合い署名活動をしました。まだこちらにあまりお友達もおらず、勇気を出してご近所の皆さんにもお願いして回りました。請願書の署名者は、約六七〇名程集まったと記憶しています。祈るような気持ちで出した請願書のゆくえを見守るため、議会の専門部会を見学に行きました。子供と同伴で参加された方もいました。しかし趣旨採択という形で、願いは届きませんでした。大きな落胆の中で、それなら次の対策を考えなくてはいけない、何とかしようと思い直しました。

伊達市で除染を行わないのなら、自分達で、自主的に除染をした方が早い。子供達は日々成長している。行政待ちで、大切な感性を育む時期を逃したくない。

私たち夫婦は話合い、自力で庭の除染をすることにしました。当時まだ小さな子供から目が離せない状況の中、作業できない私の希望にそって、主人が一生懸命除染をしてくれました。気持ちの良かったお気に入りのウッドデッキを撤去しました。新しい芝生を植え、新しい砂場を作りました。愛着のあった記念樹を抜いて廃棄処分をしました。どれも本当に大変な作業でした。主人は日々の会社勤めで疲れているにも関わらず、子供達の為に一生懸命でした。

なぜ私たちがこんな目に合わなくてはいけないのだろう・・・。誰がこんなふうにしてしまったのだろう。誰を責めることもできない状況に、悔し涙を流しました。

除染が終わると子供達を庭で自由

に遊ばせました。またこの家を好きになれた気がしました。

それから一年、私は働こうと決意しました。周りのみんなも仕事に付き、日々の生活に戻っていく頃でした。あの頃は、市政へ抱いた危機感と不信にふたをしたまま仕事に就けば、嫌な想いは忘れられるのではないか？と感じていたのかもしれません。

【伊達もんもの家の開設要望】

二〇一六年四月、仕事を始めてすぐに、伊達ママクローバーのサークルに、お話を聞きに来てくれたＮＰＯ法人職員の伊達市帰還者相談員に交流拠点を作って欲しいと長いメールをしました。二ヵ月後に、福島県の予算がついたので、働きに来ませんか？と声をかけていただきました。仕事に就いたばかりということもありお断りしました。サークルの仲間三人が、子連れで勤務してくれました。しばらくして避難体験記を書きませんか？とお話を頂き、私も匿名で投稿しました。

伊達もんもの家は、二〇一七年三月で閉所するか検討中と聞かされました。運営責任者の半田さんから、伊達ママクローバーの代表である私に面会の申し込みがありました。「本当に閉所してもいいのですか？あなたは今の仕事を本当に好きでしていますか？」？なぜ私にそんなこと聞くのだろう？余計なお世話じゃ！！！と最初には心の中で反発をしました。「一年間の継続申請をするので、条件を整えてもんもの家で働きませんか？」と促されました。その時は何となく役に立つなら、ぐらいで、了解をしました。しかし今振り返ると、その時はきちんと向き

合いたいと本心では思っていたと感じています。

【スタッフとして働く】

二〇一七年五月連休明けから、スタッフとして働き始めました。NPOりょうぜん里山がっこうスタッフという、これまで勤めた経験のない仕事でした。伊達もんもの家では、帰還者である当事者がスタッフとして働くことで、来館してくださる皆さんに寄り添う事が出来るという想いでした。同じ気持ちだよ。私もそう思うよ。

一方で、みなさんと同じように、自分の中に伊達市への怒りが見えるときもありました。不信感から学校へ行かせることも心配で、何か学校側へ伝えたくても、怖くて言えない・・・。言ったところで、頼りになんかならない。市政になんて期待していない。私達市民と、行政の間には深い溝が出来ていたのでした。それは、私自身帰還当時、伊達市に対して、子育て世代と子供を守る選択をしなかったでしょ!?守る気なんかないでしょ?と責める気持がありました。

スタッフとして色んな立場の人と関わるようになりました。ある時、伊達市で放射線問題を扱う放射能対策課担当者との出会いがありました。その担当者の一人が父親として話をしてくださった事があります。素直な気持ちで私達の気持ちを聞いてくださるその姿勢から、行政の担当者も同じ市民だと知りました。この方たちを責めることだけでは、問題の解決は出来ないと感じました。

放射能の勉強会を開催するため、専門家と事前準備の研修を行ったことがあります。当時専門家と呼ばれる方々は「大丈夫」を繰り返し、母親を説得しようと一方的に講義を行う場合が多く、参加者は不満が募る場合が多くありました。今回講義を行う専門家は、母親の目線に立っている方なのか不安でした。しかしその専門家は、初めに私達の事を知るために避難体験記を読んだといわれました。そして人生で二回泣いたうちの一回が、この冊子であったと感想を述べられました。

「あなたたちは、本当によく避難してくれた。子供を守るというその本能がすばらしい」そう言って下さいました。避難した母親たちは、神経質だといわれる時もある伊達市の中で、ほめられたのは初めてでした。スタッフみんなで泣きました。いま

までの苦労を認めてもらえたように思えたのです。専門家の講座は、お互いに疑問に思った事を話し合えるように、車座になってやりました。双方でやり取りできる事で、納得できるまで聞く事ができました。もう専門家不信はなくなっていました。専門家や行政が、この先生のように説得ではなく、納得できるように寄り添ってくれていたら、もっと早くから信用出来ていたかもしれない。もっともっと違った行政と市民のカタチができたかもしれないと心から思った瞬間でした。

伊達もんもの家で帰還した当事者として、スタッフとして働く事で、自分が原発事故や放射能不安をどう捉えているかを知りました。放射能は絶対いけないという考えや、メディアも、行政も信用出来ないという態度について、考える時間が出来ました。問題は放射能だけではなかった。子供の発達障害の悩み、学校での関り、生活習慣等があり、放射能問題はその一つだとようやくわかってきました。子供の健康を守りたい一心で、その他の部分に目がいかなかったのではないかと今では思うようになりました。

自分がこの町この場所で、どうありたいかを考える毎日を取り戻しました。この伊達市でどう暮らし、どんな子供を育てたいか必死で考えるようになっていました。子供達にもこの場所を好きになってもらいたい！楽しい町でたくさんの思い出を作ってもらいたい！そしてそれを教えるのは私達親世代だろうと思えるようになりました。

最初にあったらいいな！と私達が要望した交流拠点は、当初の目的よりもさらに発展しているなと感じています。人々が集い、情報交換や交流することで双方のコミュニケーションができ、つながりが生まれている。

不思議な事にそんな私達の周りには、りょうぜん里山がっこうのみなさんをはじめ、ママ達や、子供と触れ合ってくれる近所の高齢者の方々や、中間支援ＮＰＯ団体の皆さんや、地域で活躍するみなさんが、あたたかな関わりを持ち続けて応援してくださっている。大好きな伊達もんもの家スタッフみんなと今度は帰還者としてではなく、子育ての当事者として新しい交流場所を作ってみたいと、新しい伊達の未来に想いを馳せています。

特別寄稿

分断をつなぐ 伊達もんもの家

【半田　節彦】

プロフィール
■中国旧満州生まれ
■幼少時に山形県引揚げ体験あり
■複数のNPOに20年間従事
■2016年４月～伊達市帰還者支援に従事
９月～伊達もんもの家責任者として勤務

福島県は原発の多い県というイメージですが、県民消費電力の三十％以上を再生可能エネルギーで発電しています。首都圏向けの東京電力の原発は安全と信じて、無防備の状態で放射能汚染をこうむりました。二百万県民の内、十六万四千人が避難し、なお四万四千人が避難中です。

福島県は東京電力に原発の全廃炉を強く要請中。東北電力は浪江・小高原発新設計画を撤回し、予定地を浪江町に無償譲渡しました。再生可能エネルギーで、ロボット産業や複合機能を備える施設展開など、新たな未来が見えています。

伊達市は、国県の施策を待たず、自主財源で先駆的に独自施策を実施しました。小中の校庭除染とエアコン設置、生徒住民にガラスバッチを装着しました。国の除染基準である年間追加被ばく線量年間１ミリシーベルト（毎時０・２３マイクロシーベルト）以下は、ガラスバッチ実測で不一致と主張。個人実測の内部積算被ばく線量に基づき、当面の追加被ばく線量を年間積算５ミリシーベルト（毎時１マイクロシーベルト）以下とし、長期的に年間１ミリシーベルト以下をめざしています。地域を線量毎にＡＢＣエリア除染とし、子育て世代が多いＣエリアはスポット除染のみとしました。

参照：伊達市災害記録誌・３年の記録
122、195～198頁

この除染政策は、市民間で議論が分かれ、子育て世代は他市同様に全面除染を望む請願を提出しました。子育て世代は、東電に許せない強い想いを抱いています。伊達市には、寄り添ってくれない不信感を抱く方が少なくありません。行政と住民、

男女や家族、世代間で自分の意見にこだわり、相手の意見に耳を傾けない実態があり、話し合いが進まず絆が切れている状態があります。

伊達市の合計特殊出生率は、原発爆発前から県内最下位です。現在他市に比べても見劣らない先駆的な子育て政策を展開中ですが、若年女性には魅力的な地域未来が感じられないのか、転出超過が続いています。

伊達市とNPO連携による帰還者支援事業は、試行錯誤の連続で、不信反発も受けました。安全基準のみを優先し、相手の不安を受け止めず説得することが、平行線の原因となっていました。

伊達もんもの家では、互いに信頼しあえる関係づくりに主眼をおく寄り添いに転換しました。対等の関係で本心を語り合える場づくりと、想いを否定せず、聞き合い話し合い方針を決め、実践するワークショップが、絆の結び直しに有効であると実感しています。当事者が自主的に解決する姿勢と智慧を身につけ始めれば、課題は時間と共に解決していくのです。

ご一緒する中で、子育てママ達の成長こそが、伊達の未来に大きく影響すると感じています。この協働体験から、三つの提案があります。

一つ目は、人間力を高める研修の開催と、子育て世代を核とした多世代交流施設の設置です。

二つ目は、行政が予算を確保し、人財育成を主導、官民協働を後押しすることです。

三つ目は、決めつけ、不満、恐怖の感情で見る事をやめ、新しい認識と実践手法に転換することです。新しい認識とは、可能性と行き止まりを見極め、未来から眺望して目的地を観るまなざしです。新しい実践とは、心を含めたPDCAサイクルを展開し、繰り返し習熟することです。

この三つは、必ず人口減少社会を創り変える強い力になるでしょう。

編集後記

避難者・帰還者支援事業責任者

半田節彦

原発事故後の問題解決に向かう福島県民の葛藤と苦悩は、今なお続いています。試練にどう立ち向かいどう引き受けて、新しいふるさと創造に挑戦しているのか、心を寄せて頂ければ何よりです。特定避難勧奨地点に住む方と山形県で避難者支援に従事されている方々の寄稿文が、華を添えてくれました。人災と天災が頻発しています。避難者支援の皆様には、「困った時は、お互い様」という挨拶言葉に、存在をかけた息の長い命を吹き込んで頂き、感謝と尊敬の念を禁じ得ません。

八年目を迎え、失われた人命と生活・地域破壊を意味あるものとするために、これまでの対応を振り返り、じっくり評価する時期に来ているのではないでしょうか。何が良かったのか？何が足りず何を育み創造しなければならないのか？私たち住民が苦手とする評価作業を集約する場を提案して頂ければと願っております。人間力養成のカリキュラム内容の検討と原発排出物処理の検証にも強い関心を寄せています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

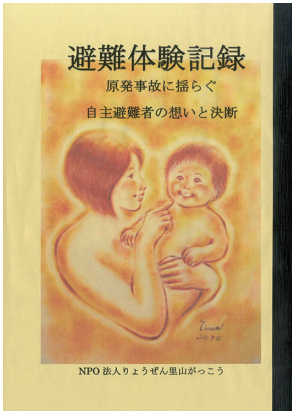
伊達もんもの家運営スタッフ

新井・鈴木・髙野・髙橋・緑川

この冊子には、自主避難者の、迷い、不安、葛藤、決断、それぞれの想いが記されています。避難から帰還した方々の想いも様々です。まだまだ迷いながら、それでもどうにか前を向いて進んでいく姿に心打たれました。

今回の手記には、自主避難者に寄り添った支援者の方々の想いも綴られています。避難した多くの親子を、なんとか支えようと奮闘した避難先の人たち。こうした支援者がいたからこそ、数年間にも及ぶ避難生活を続けることが出来たことを忘れてはならないと強く思いました。

やがて、大人になり親になりゆく子供たちの未来が、健康と幸せであることを心より願っています。



二〇一七年三月十一日発行

―避難体験記録―

この冊子はりょうぜん里山がっこう
ホームページに掲載されています。

「それでも福島でこどもを
育てていくために」

2019年2月11日発行

平成30年度福島県県内避難者・帰還者心の復興事業

発行者　特定非営利活動法人 りょうぜん里山がっこう
〒960-0804 福島県伊達市霊山町大石字細倉17
TEL 024-587-1032　FAX 024-587-1082
http://date-satoyama.com

編集者　伊達もんもの家運営担当
半田　節彦・新井　芳美・髙橋　寛子
髙野奈津子・鈴木　智子・緑川　智子

表紙絵　小原　風子
写真提供　橘内　清隆